

平成30年7月30日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人 日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201780226

氏名 大崎果樹

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 モスクワ (国名 ロシア連邦)
2. 研究課題名 (和文)：ロシア聖書翻訳史におけるレフ・トルストイの位置づけ
3. 派遣期間：平成29年9月1日～平成30年6月30日(303日間)
4. 受入機関名・部局名：正教聖チーホン人文大学 神学部
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

派遣先大学のゼミや講義に出席して宗務院時代のロシア正教会史に関する知識を深めた上で、トルストイ—教会—国家という三者関係に着目し、トルストイの聖書翻訳の背景にある思想と、それに対する正教会側からの批判的言説を分析した。さらに、トルストイと同時代のロシア語聖書翻訳史に彼の聖書翻訳事業を位置付けることによって、トルストイによる聖書翻訳の意義を明らかにしようと試みた。

また、トルストイ研究にはとくに膨大な蓄積があるため、彼の宗教論に関してこれまでロシアで行われてきた研究の成果を収集し読解することにも注力した。

加えて、派遣期間中には以下の学会に赴き、最新のトルストイ研究及び正教研究の動向を調査した。

- i. IX colloquium Междисциплинарного интеллектуального клуба «Лев Толстой и революция», Ясная Поляна, 9–11 октября 2017 г. (<http://www.pravoslavie.ru/106940.html>).
- ii. Международная научная конференция «Собор и соборность: к столетию начала новой эпохи», Православный Свято-Тихоновский гуманитарный университет, 13–16 ноября 2017 г. (<http://pstgu.ru/news/coming/2017/11/16/70200/>).
- iii. Толстовские чтения 2017 «Лев Толстой и революция», Государственный музей Толстого, 21–22 ноября 2017 г. (http://tolstoymuseum.ru/scientific_work/conferences_workshops/2095/).
- iv. XIV форум «Задонские Свято-Тихоновские образовательные чтения “Святитель Тихон Задонский на перекрестке традиций (Афон – Валаам – Задонск – Оптиная Пустынь – Соловки)”», Липецкий государственный педагогический университет, 26–28 апреля 2018 г. (<http://mitropolia-lip.ru/26-28-aprelya-sostoyatsya-zadonskie-svyato-tihonovskie-obrazovatelnye-chteniya>).

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

研究成果発表等の見通し：

2018年10月にロシアで行われるトルストイ・カンファレンスにて、本滞在中で得られた研究成果を発表する予定である。さらに、発表に対して得られたコメントを反映した上で、2018年度中にロシアの査読誌へ論文を投稿することを目指している。

また、今回の滞在中に知り合った正教研究者と共同で、正教に関する最新の概説書を日本語に翻訳し出版することを計画している。この書籍は、正教の基本的な教義や奉神礼の仕組みなど、正教神学や正教に関する文化を研究していくにあたって不可欠な知識を、豊富な図を添えてわかりやすく解説したものであり、この本を紹介することは、日本における正教研究の発展に寄与するものと確信している。

今後の研究計画の方向性：

今回の滞在中ではトルストイの聖書翻訳事業に焦点を当てた研究を行ったが、今後はさらに文脈を広げ、当時のロシアにおける教会—国家関係を踏まえたロシア正教会とトルストイの対立全般に関する研究を進めていく予定である。加えて、この対立が日本正教会においてどう反映されたかという観点からも分析を行うつもりである。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

- i. 日本には、正教神学を専門的に研究できる学術機関は存在しない。そのような状況のなかで、ロシアにおける正教研究の一大中心地である正教聖チーホン人文大学にて、自分の博士論文を執筆するうえでもっとも重要な先行研究者から研究指導を受けることができたこと、さらに、神学大学独自のカリキュラムのもとで体系的な神学の講義を受講できたことは、研究自体の進展のみならず、今後の研究の方向性を定めることにも寄与した。とくに、受入研究者のゲオルギー・オレハーノフ教授による講義「トルストイ、ドストエフスキーとロシアの宗教危機」や「19世紀から20世紀初頭のロシアにおける教会—国家関係」、「17世紀から20世紀初頭のロシアにおけるローマ・カトリック教会の歴史」は、自分の研究テーマと密接に関係する内容であり、研究の土台を固める上で大いに役立った。また、大学院生向けの論文指導のゼミにも出席し、細やかなゼミ指導のもとで、ロシア語で論文を執筆するための基礎を学べたことは、今後、研究成果を国際的に発表していくにあたっての助けとなると考えられる。加えて、ロシア文学を神学的・宗教学的観点から研究する際の方法論が学べた点も有益であった。
- ii. 受入研究者の紹介により、トルストイに関する一次資料や先行研究を専門に所蔵している国立トルストイ博物館附属図書館の利用許可を得た。この図書館では、トルストイに関する膨大な先行研究が著者別、テーマ別に細かく分類・保存されており、貴重資料もすぐ手に取ることができるようになっている。この図書館を利用することによって、トルストイに関する網羅的で効率的な先行研究の収集が可能となった。
- iii. 正教会の聖職者や、ロシアの神学と文学、宗教哲学に関する分野の研究者と交流し、彼らの最新の問題関心や研究成果を間近で知ることができた。さらに、本滞在中に知り合ったトルストイ研究者から、2018年10月に行われるトルストイ学会への発表のお誘いをいただいた。
- iv. ロシアに長期滞在中であることによって、日常的に正教会へ足を運ぶことが可能となり、教会生活や正教の伝統を肌で感じることもできた。この経験は、正教自体を研究するうえで不可欠であるのみならず、正教文化のなかで育ち、のちには正教会の批判者となったトルストイの主張の背景をより深く理解するためにも重要であった。